



©Marken fotografie

ミヒャエルはゲヴァントハウス管のソロ・チェロ奏者として出発したが、指揮者になってからもベルリン放送響の首席チェリストを2000年代半ばまで平行して務めており、2011年のドレスデン・フィル首席就任当初は、指揮者としてはまだライジングスターだった。当時のドレスデン・フィルも旧東ドイツの多くの楽団がそうであったように、いま一つあか抜けない印象があったが、おそらく長い伝統と、変化を重視する西側の価値観の狭間で、方向性をつかみあぐねていたのだろう。互いに求め合うものがあり、ケミストリーがうまくいった結果として、彼らは地域の音楽シーンを越えたコンビへと変貌した。2017年には本拠地のクルトゥーア・パラスト（文化宮殿）も建て替えによって最新施設に生まれ変わっているが、これも巡りあわせだろう。

ザンデルリンクはN響、読響、都響など日本をはじめ世界中に客演しているが、今シーズンはコンサートヘボウ管、パリ管、ベルリン・フィルといった世界最高峰の楽団にも次々とデビューを果たし、文字通り世代の代表格へと成長した。一方、ドレスデン・フィルは秋から次期首席指揮者に長老マレク・ヤノフスキを迎える。ヤノフスキは同団を2001年から2003年まで率いているが、この時にはさしたる成果を残さず短期政権に終わっている。今や世界的巨匠として揺るぎない名声を確立したヤノフスキだから、現在のドレスデン・フィルとなら何かを成し遂げてくれそうな気がする。

ザンデルリンクとドレスデン・フィル。時計の針がもう一回りした時、この協業は互いにとっての大きい飛躍の時代として思い返されるのではなからうか。その終着駅がここアジアというのも、嬉しい偶然だ。耳と心にしっかりと刻み付けようではないか。

江藤 光紀 (えとう・みつのり)

筑波大学人文社会系准教授。音楽評論家として「日本経済新聞」「モーストリー・クラシック」「ぶらあほ」などに寄稿するとともに、劇場や博覧会など、芸術と社会をつなぐ文化装置にも関心を寄せて研究している。最近の著書に「幻の万博」(共著、青弓社)。